

てんかんからみる人物の横顔

～異論異説のてんかん史～

松浦雅人 MATSUURA, Masato
田崎病院副院長／東京医科歯科大学名誉教授

【第31回】

藤原定家のてんかん説



(出典：文献11参照)

藤原定家

伝藤原信実筆(鎌倉時代)。

和歌の才により後鳥羽院に見出され、『新古今和歌集』の撰者を務めたことでも知られる歌人・藤原定家。定家が半世紀以上にわたり記し続けた日記『明月記』には、風病(神経病)をはじめ、自身が患ったさまざまな病歴が詳細に記録されている。後世になり、精神科医で作家の津川武一が定家の記述やその性格、和歌の作風などから、定家の風病がてんかんであるという仮説を立てた。津川は生涯にわたり定家への関心を持ち続けた。

はじめに

津川武一(1910~1988)は1987年に藤原定家のてんかん説を日本病跡学会で発表し¹⁾、同年に一冊の本にまとめた²⁾。それによると、定家が19歳(数え年、以下同じ)から書き始めた『明月記』を読み、20歳のときの日記に「心神忽ち悩む……病躰太(はなは)だ遺恨、前後覚えず」(『明月記』は漢文体であるが、ここでは『訓読明月記』³⁾による)と書かれていたのを見て驚いたという。突然、意識消失発作を起こしたのであり、そんな病気で甚だ遺恨であると書かれている。精神医学を専攻していた津川はてんかんの発作ではないかと直感したという。

さらに『明月記』を読み進めると、定家自身が「風病」に罹っていると繰り返し書いている。当時、風病とは神経病の意であり⁴⁾、風病の記載は30歳代に5回、40歳代に7回、50歳代に5回、60歳代に1回、70歳代に1回あるという²⁾。37歳の日記には「世以て之を秘す、外見すべからず、外見すべからず」と書き、このことは世の中に絶対に秘しておくとして述べている。また、52歳の日記には「疑ふらくは是れ魔性のなすか、予、少年より常に此の如き病有り……忍びて之を言はず」とあり、小さいときからあるこの

病気は魔性によるものかと疑い、我慢して誰にも言っていないと書いてある。これらより津川は、定家がてんかんに罹患していたと解釈した。「あとがき」によると、歌聖とも言われ、広くあがめられている定家をてんかんかもしれないなどと言っていいのだろうかかと気後れし、大変なことをしているのではないかと考え込んだという。しかし、生涯にわたって定家を苦しめたこの病気の故に、象徴的で観念的で耽美的な定家の歌が生まれたと肯定的に考え直して公表したと書かれている。その後、藤原定家のてんかん説に言及し